

河川水利調整論

新沢嘉芽統著

岩波書店刊

昨秋出版された本書は、すでに広くジャーナリズムに紹介されている。たとえば朝日ジャーナル、エコノミスト、図書新聞（以上週刊誌）、および科学、水利科学などの専門誌から日本経済新聞に至るまで、一般にかなり高く評価した書評が掲載された。それに全国で水資源開発をめぐる諸計画が種々話題を呼んでいる現在、タイムリーであった点も手伝ってか、私の知る限りでも本書は専門書であるにもかかわらず相当に広い層で読まれているようである。そのうえに、内容が抽象的原理でなく、現在全国各地の開発計画に潜む問題点を具体的にあげ、著者の見解をズバリズバリと述べている点が、何よりも本書を活気づけ、飽かず読ませる魅力ともなっている。

工業、都市、農業、発電の諸用水、それに治水がからみあった水争いの時点を直視して、その間の調整の基本的なあり方を求めようというのが本書のねらいである。第1編では、明治以来の農業水利と治水をめぐる調整例が類形化され、第2編では、同じく明治以来の発電、上水道、工業用水の開発と農業水利の調整例が検討され、既存の権利が個々の場合にどのように保護され、もしくはゆがめられたかが解説されている。

この2編を受けての第3編が“河川総合開発における水利調整”と題され、本書の中心テーマとなっている。ここで利水の4部門（発電・上水道・工業用水・農業用水）と治水とが調和するように河川を利用し開発するにはどうあるべきかが具体例によって説明される。そこで当然、現在の河川開発の焦点である多目的ダムをめぐる問題点が並べあげられている。多目的ダムの必然性、機能については、出水時の実績、農業用水や発電効果の成績が遠慮なく検討されている。ついでダム建設にともなう水没補償問題について述べ、“金銭を与えて縁を絶つ”という考えから脱すべきであることを主張している。こんごの補償措置の試金石として、産業計画会議が提案している利根川沼田ダム案を持ち上げ、その成否にこれからの大河川の総合調整が可能か否かがかかっているという。つぎに河川維持水については特にその不明瞭さについて建設省を強く攻撃している。つぎはダム下流の発電と他水利の調整を逆調整池の問題、水稻の早期栽培にわけて問題点を指摘している。後者では産業計画会議勧告で、早期栽培が将来の水問題解決をもたらす要件だと主張した楽観論を、利根川の事例によって反論する。つぎには下流部の水利調整に関連して、農業用水の合口、調整池、河口せき、湖沼の利用などの諸問題について、全国ほとんどの重要河川を具体的に取り上げて問題点を検討し、著者の率直な批判が加えられ、特に興味深い。第3編の最後には多目的ダムの費用振分け問題について

論じ、現在の妥当支出法がわが国の実情にそぐわないように思われ、身替り建設費法だけの方がよかろうと述べている。

全編を通して見れば、現在ならびにこれからの水資源開発途上に横たわる問題点が多面的に洗われていて、特に開発計画に関係する技術者やプランナーにとって勉強になる点が多い。本書は影響力が相当に大きいように思われるので、攻撃目標にされた計画当事者は、条理をつくして何かの機会に（たとえば学会誌上などで）反駁を加えて事情を説明したらよいと思う。ただその場合、末梢的な事象を捕えて揚げ足取りにならぬよう、著者が全編にわたって何をいわんとしているかを十分に考慮したうえでの反論なり批判であって欲しい。つまりある極限のわくを意識した発言でなく、共通の広場へ出てきての意見であってこそ建設的な批判となりうるであろう。

著者は最初役人として、最近はずっと東大農学部で農業水利を専攻しているが、特に社会科学的もしくは経済学的側面からも問題を捕えて調査研究を続けユニークな成果をあげてきた。本書の内容の相当部分は、最近数年間すでに資源調査会専門委員として、また農林省の応用研究や利根川水利調整協議会委員としての活動をもとに、それぞれの報告書に発表されてきたものである。これらの集大成が団野信夫氏（朝日新聞論説委員）の斡旋で今般出版の運びとなった。おそらく著者はいままでの調査を、一応現段階でこのように整理し、こんごの研究発展への橋頭堡を築くつもりであろう。したがって読者もはばかりとなく、欠陥を拾いあげて著者にぶつけるがよい。それこそ著者の歓迎するところに違いない。たとえば著者の広い視野にもかかわらず、農業以外の分野は事情聴取や資料検討が弱い。また個々の河川の紛争史など実に豊富な資料をあさっているにもかかわらず、なお史実の列記に終り、いま一步の史観の充実が期待される。さらには来るべき産業構造のなかでの農業用水のあり方についての積極的提案を、読者はひとしく知りたいたいと思うだろう。さらに著者に望みたいのは、水資源開発をめぐる、技術の進展と日本の社会的経済的諸条件の間の関連をいま一步突っ込んで欲しいということだ。技術がどのような役割を果たしてきたか、あるいはこれからどのような条件のもとで技術がその能力を発揮できるのか。このような難問をふくめて、著者のつぎの研究のステップに多くの読者は期待を寄せている。

著者：東京大学助教授（農学部）

体裁：A5版 520 ページ、定価 1300 円

1962年9月3日発行

（東京大学 高橋 裕・記）